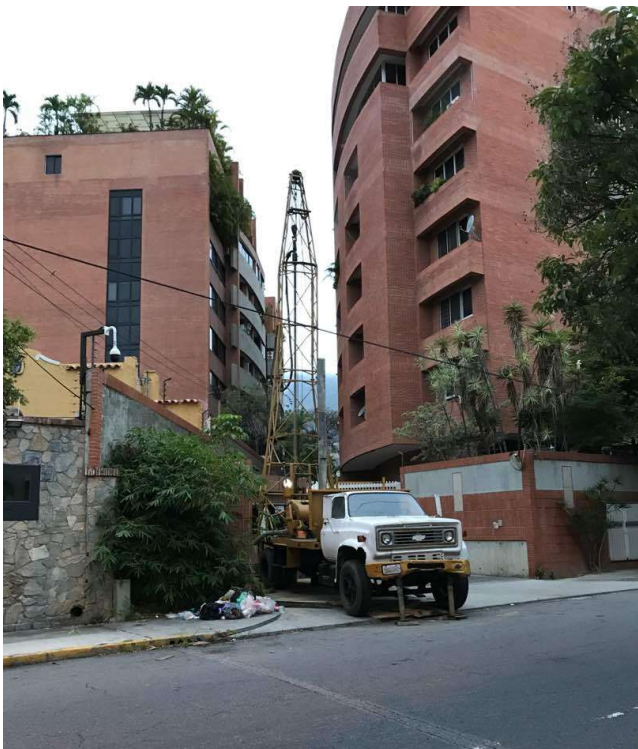


SONRISA

そんりさ

vol. 170



高級住宅地で井戸を掘るための工事
(2018年6月江指の友人撮影)

ベネズエラ・カラカスの
混沌とした日々

- | | | |
|----|---------------------------|-------------|
| 02 | ベネズエラ・カラカスでの時間（その1） | ……江指 美穂 |
| 06 | ナルコ回廊再び 2019年 ベラクルス～コアウイラ | ……山本 昭代 |
| 10 | グアテマラ 右派政権の継続—軍事化に拍車 | ……新川志保子 |
| 12 | 回想のラテンアメリカ ニカラグア編 | ……唐澤 秀子 |
| 14 | ラ米百景 80年経っても終わらない内戦 | ……伊高 浩昭 |
| 15 | ペルー音楽 来日！テクノクンビアの女王たち | ……水口 良樹 |
| 17 | メキシコ料理 マヤ風サルサ | ……ミゲル・アクーニャ |
| 18 | ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み | ……小林 致広 |

2019年10月19日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）発行

ベネズエラ・カラカスでの時間（その1）

江指 美穂

ベネズエラってどうなっているんだろう。何が起きているんだろう。今振り返ってみてもわからないことだらけだ。経済がこんなになっているから、じゃあこうなるんだろう。情勢がこうなれば、市民はこう動くはずだ…そうはならない。どこかの国がベネズエラで実験を行っているんじゃないか。そんな実しやかな噂まで流れるほど、事態が転がっていくのだ。

2016年5月～2018年5月まで、在ベネズエラ日本国大使館の専門調査員として、首都カラカスに滞在した。中南米での生活は高校でのメキシコ1年のみ、仕事として滞在するのは初めてという中でのベネズエラ生活となった。

毎日続くデモ、モノ不足、どこにでもできる大行列…。その一方で、すぐ広がるカリブ海、街のどこからでも見える市民の誇りアピラ山があり、カラフルなコンゴウインコは空を飛び交う。年間平均気温は20～25℃と、年中快適な気候で、自然豊かで美しい国だ。

今回は私の限られた日常生活からの視点とはなるが、相反する様々なことが共存するベネズエラでの2年間の日々の生活を振り返って書かせていただいた。目まぐるしく変わるベネズエラ情勢であるため、昨年までの一個人の視点からの情報として読んでいただけると幸いである。

カラカスの道

空港から市内に向かう道から見える景色には、とにかく色がない。赤茶けたというか、灰色というか、独特のくすんだ色が広がる。そのところどころの壁に描かれた色のあるチャベス大統領やマドゥーロ大統領の壁画。またそのところどころに車を停車させ修理している人たち。空港に到着すると、いつも迎えられる風景だ。

「これはもうマリオ・カートだね…。」よく運転しながら話していた。ベネズエラの道路は、穴ぼこだらけ。穴は埋められるが、すぐに同じところにまた穴ができる。夜に灯る街灯は日に日に少なくなっていくため、とにかく道が暗く、穴が見えづらい。そのまま突っ込んでしまい、ガタンと



高速道路から見える街並み Barrio(斜面に建てられた貧困層の住居) (2017年5月撮影)

衝撃を受けて気づくことや、直前に気づき、同乗者にごめん！と言いながら、パッとよけることが多かった。高速道路も同じ状態なので極めて危険だ。事故も多い。高速道路の路肩には、ところどころに停車している車がいつも見受けられ、ボンネットを開けて何か直そうとしている。

国内で生産している車はほとんどない（ベネズエラ自動車工業会によると、2018年1月～9月の生産台数の合計は705台、その大多数がトヨタ車）。そのため、故障しても部品が簡単に手に入ることはない。手に入るとしても輸入品。輸入品は高額だ。さらに経済制裁の影響等から、交換部品の入手困難さは続いている。こんなに道路も傷んでいると、車もさらに傷む。みんな傷んだ車体で、だましまし、乗っている状態だった。

水と電気が止まると…

工作中、急にパソコン画面が消える。「あ、停電だ。」長年にわたりメンテナンスが行われていないため、インフラはぼろぼろになっており、停電、断水が時々起こった。停電になると、住んでいたマンションでは給水ポンプが作動しなくなるため、水も出なくなる。夜はろうそくで過ごし、停電に備えて貯めておいた水で過ごす。

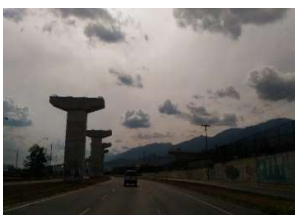
停電や断水の度合いは、地域によって異なる。出ない地域では、1日に2～3時間のみ給水というところもあった。朝1時間、昼1時間、夜1時間。働いていると、昼1時間の給水には何もできない。そのため、朝1時間と夜1時間のみ。朝の1時間でシャワーと食事を作る、夜の1時間は皿洗いをして洗濯機を回すことで精いっぱいだ。

洗濯機を回している最中に給水が止まってしま

い、洗濯が途中のままになってしまい、朝の水が出る1時間の間にやってしまうことが終わらず、仕事に遅刻してくるという同僚もいた。また私の住んでいた地域は、停電以外では基本的に水は出ているため、水が出ないという同僚が、泊まりに来たり、シャワーを浴びに何回か来たりした。

ある日友人の家で集まって食事をしようという時、その家が断水となった。水がもうすぐ来るはずだからトイレはちょっとその時まで我慢しよう…と決めてとにかく食事を始める。何時間かするとさらさらと排水管を水の流れる音が。「あ、水が来たよ」と、その時にバートとみんなトイレを済ませる。またしばらくすると水が止まり、トイレに行かないようにする…を繰り返しながらの食事会ということが何度かあった。

主な電力需要を賄っているグリダムの水力発電所を含め、インフラの不整備はいたるところで見られた。道路、街灯、インターネット、地下鉄、建物やモノレール。建設中のまま放置されたもの、その後のメンテナンスがされていないもの、逆にそういったもので、街ができていくというような印象だった。南米一豊かな国と言われていただけあって、立派なビルや施設の名残はあるため、メンテナンスがされていないと余計に大きな影を落とす。できた当時は立派なビルだったんだろうなあ、近所のビルを見てよく思った。



放置された建設途中のモノレール (2018年5月撮影)



音楽理論の先生とチェロの先生
の家のテラスから見たアピラ山の
(2017年12月撮影)

ヨガの先生

「あなたの家の水が一番美味しい。」週1回、自宅でヨガのレッスンをしていていた先生がいつも言っていた。先生は毎回空の大きなペットボトルを数本持ってきて、自宅に設置された浄水器からの水でペットボトルをいっぱいにして持って帰っていた。売っているペットボトルは高いし、底に砂利が入っていることもあり、この浄水器の水

が一番いいのだと言っていた。市内の道路わきには湧き水が出るところがあり、その水を求め多くの人がペットボトルを持って集っていた。車で何本もボトルを持ってきて、水を汲んで持って帰る光景は日常だった。

ある日、先生から、車の窓ガラスが割られた写真と今日はレッスンができないとのメッセージがあった。車のバッテリーと替えタイヤを盗まれ車を動かさない、バッテリーを探しているが売ってくれるところがないとのことだ。バッテリーを持って行かないと売ってくれないのだという。

「…よくわからないんだけど？」聞くと、新しくバッテリーを手に入れるには自分の持っている古いバッテリーをお店に渡す必要があるとのこと。店も仕入れられるバッテリーがないため、受け取ったバッテリーを修理してまた転売するという手法で商売をしていたため、バッテリーを受け取れないと販売しないそうだ。バッテリーや車の一部が盗まれるということはしょっちゅうあった。すぐに転売できるものを盗む。先生は何か月かバッテリーが手に入らず、車が使えないのでほとんどレッスンをすることができなかった。

先生のレッスンは今もスカイプで取っており、「今度日本に行くの！」と、ある日先生はうれしそうに報告してくれた。アメリカにいる知人が日本に空手の試合に行くから、ベビーシッターとして付いてきてくれないかと言われ、ビザの手続きも済んだとのこと。

いいね、ぜひ楽しんできてと話していたのだが、ちょうど出発の日が今年3月の大停電の日。飛行機は飛ばず、空港は半ば封鎖状態。約1週間、運休などが発生し、結局先生は日本に行けず本当に残念がっていた。

航空会社の撤退が相次ぐ。収益確保が困難だけでなく、メンテナンスができない、治安の悪化から航空会社クルーの安全面を確保できないという理由もある。近くに行くにも乗り継ぎをしなくてはいけない。現在、アメリカの航空会社がないため、残っているのは、トルコ航空、TAPポルトガル航空、イベリア航空、エア・ヨーロッパ、コパ航空、ウイング（コパ子会社のLCC）、エール・フランス、プルス・ウルトラ・エアラインズ、クバーナ航空という9社だけである。

ピアノの先生

紙がない。紙不足でトイレトペーパーがなかったり、新聞の発行が取りやめられたり、発行部数や発行ページが激減しているような状況下、楽譜は見つからないことが多かった。当初、週末にピアノ教室に通ってレッスンを受けていたが、毎週末に行われるデモのため、道路が封鎖され、通えなくなったため、友人の紹介で先生に自宅に来てもらいレッスンをしてもらっていた。

一時帰国で日本へ帰るといふ時、先生から、もしこの楽譜が日本で売っていたら買ってきてくれないかと頼まれ、日本から買って帰ると、とても喜んでくれた。大学の修士コースで音楽を学んでいる先生だが、楽譜が簡単に手に入らない。多くの大学で教授がどんどん移住したり、出国したりして授業にならない状況も多い中、生徒へのレッスンと修士論文を先生はがんばっていた。

ピアノの先生たちと時々映画に行った。ピアノの先生、音楽理論の先生とチェロの先生。きちんと教育も修了し、教えているプロたちだ。彼らにも映画代はとても高額になり、先月映画に行ったから、今回は観るのはやめておこうかな、というくらい、大きな出費になっていた。ポップコーンを買うのも、高すぎて悩む、そんな状態だった。

映画館は高級なのに、オーケストラは無料ということがあった。先生たちの友人が演奏するからということで一緒に聴きに行った演奏会、これも無料だった。終了後にお別れのあいさつをして



無料コンサート
(2018年2月撮影)

るといふ。その友人は、今回の演奏を最後に、国を出るとのことだった。出た先でももちろんオーケストラに所属することはない。掃除などできることをして生活をしていくと話していた。その数か月後、チェロの先生もエクアドルへ移住していった。

海に行こう

市内から北に車を少し走らせると、パッと目の前に海が広がる。学生時代は山登りサークルに入って



ロスコスビーチ
(2017年10月撮影)

いて、特にビーチに親しんで育ったわけでもない。海が近いと、こんなにもいつも行きたくなるものなんだなあと、ベネズエラ人と話をしていると、ビーチに行くことを日常の一部として話している意味を改めて実感した。首都から車で約40分。海はカラカス市民にとっても身近で、長期の

休みではなくても出かけていた。

「あ、また検問に捕まったかな…。」海までの道のりには、軍の検問が何回もある。大抵は窓ガラスを下げて中を確認されるのみだが、時々ランダムに路肩に止められ中をチェックされる。何かかで行くと、前後を走っていたはずの友人の車が見当たらなくなり、検問に捕まったんだと少し先で待つ。その横を、催涙弾などを持った国軍の乗ったバイクやトラックがすれ違っていく。

トラックの荷台には立ったままの多くの市民が乗っていて、道のあちこちで乗り降りしている。バスが部品不足などで使い物にならないこと、バス代金もどんどん上昇し、乗客が代金を払えないこと。現地友人によれば、2019年8月で高い路線では、2,000ポリバル（デノミ前の2億ポリバル・フェルテ）を徴収。最低賃金は食料チケットを除いて、40,000ポリバル。現金不足のため乗車賃を払えない乗客がほとんどであることから、運転手がバスを出さないことで公共バスが激減したためだ。近所の何人かが集まり、近くでトラックを持っている人に乗せてもらって移動する。軍のトラックが同様に市民を乗せているのも見かけた。

ビーチの近くには別荘風のマンションやホテルが立ち並ぶが、どこも閑散としている。メンテナンスされていないの是一目で明らかだ。よく行ったビーチに立つシェラトンホテルの抜け殻。骨組みだけが残ってさびている。たまに2~3人が工事なのか、点検なのかをしに来ているのが見える。滞在中2年間でも一向に修復が進まず、ホテルはずっと同じ状態だった。もしこのホテルがきちんと運営できる状態だったら、とてもにぎわう高級

リゾート地だったんだろうなと、時々想像した。

そのビーチでは、水中眼鏡とバケツを手に、波打ち際で潜る人たちを見かけるようになった。「魚でも取れるのかなあ。」と話していたのだが、ある日、何をしているか訊いてみると、金を取っていると言う。市内でもマンホールの蓋や配管の一部等金属がよく盗まれていた。身の回りにある少しでも価値のあるものは何でも対象になる。

携帯電話はよく狙われるものだった。いつでも誰でも欲しがり、交換価値が高い。白昼堂々、盗られたという話は跡を絶たない。道路で渋滞にはまると携帯強盗に遭う可能性がある。渋滞で逃げ場がない状態を狙い、コンコンと窓ガラスをノックして携帯を出せと脅して盗っていく。海で金の収穫があった！という様子を見ることはついになかったが、淡々と生活のために何かする姿勢だった。

食べること

マンゴーの季節になると、熟れたマンゴーの木が街中のあちこちで見られ、同時に石を投げてマンゴーを落として取っていく人も見かけるようになる。マンゴーの木がある家では、塀越しにマンゴーが盗られていく。マンゴーは市民の重要な食料源になっていた。デザートなどではなく、重要な食料だ。みるみる痩せていく人をこんなに見たことはない。事務所の入る建物の警備員さんがどんどん痩せていった。1日3回分の食事はないので、2回にしているが、それもできず1回の時もあるという。深刻な食糧不足、価格高騰のため、商品はあっても買える価格のものがない。

体重が減少する国民が増え、マドゥーロ大統領の名前から取った「マドゥーロ・ダイエット」という言葉が流行った。大統領が「マドゥーロ・ダイエットは健康にいいんだぞ」とTVで公言する。どうかしているんじゃないのかと思ったのは初めてではないが、国の統治者としてのモラルってどこにあるのかと思わざるを得なかった。

「今日はパスタが〇〇スーパーで、統制価格(政府が定める安価な価格)で売られている」などの情報を入手すると、多くの人とその商品を目指して並ぶ。みんな様々なネットワークを持っていて、コミでここのスーパーでこれが統制価格で買えるとわかると広がり、あっという間に早朝から長蛇



高級レストラン
(2016年12月撮影)

の列ができる。小麦粉や洗剤など生活必需品だが、1人1個のみなど、購入できる数に制限があり、十分に買い求められる状態ではない。

スーパー等の商品は、見たことのないメーカーばかりだ。輸入品はない。並べる商品がないため、棚がガラーンとしている。精肉の棚にハムとチーズしかない。たまに商品が入ると、棚を埋めるために一斉に並べる。

スーパーの入り口には常に軍人がいて、中も時々巡回する。そのため、あまりおおびらに写真は撮れない。こうした調査をするリサーチ会社も、少しでもメモを取ったりしていると、何をしているんだと、咎められたり、カメラを取られる。そのため、気づかれないように注意しながら調査をしているとのことだった。

スーパーには未明から人が並び始める。私のマンションは大型スーパーの隣にあったため、朝4時ころには、その並んでいる人たちに向けてコーヒーを売りに来る人たちの声が聞こえ始めた。そして週末の夜になると、そのスーパーの前にあるホテルからは、音楽が近所に響き渡り、豊富な食材とお酒でパーティが行われるのだ。

ホテルの近くのゴミ出し場には食べ物が入っているため、朝からゴミ袋を開けている人たちを目にした。私が赴任した2016年にはそれほど見なかったが、2017年、2018年とゴミをあさる人たちを目にすることは日を追うごとに増えていった。

ゴミの取り合いで争いになったというニュースもよく聞くようになった。そうした人たちは、けっして汚れた服装をしているわけではなく、ゴミをあさらないといけないうには見えない。コーヒーショップで何かくれないかと差し出してきたセニョーラの爪は、赤いマニキュアで塗られていた。何があつて、何がないのか、よくわからなくなることが多かった。

(その2)は171号掲載

ナルコ回廊再び 2019年

ベラクルス～コアウイラ

山本 昭代

2019年3月、春休みのメキシコ訪問の報告。ベラクルスの行方不明者家族の会ソレシートが発掘する秘密墓地を再び訪れ、またほかの地方で秘密墓地の発掘を行っている人たちの活動を見ることができた。2018年に来日してもらったソレシートの会代表のルシア・ディアスさんの紹介で、メキシコ北部コアウイラ州のグループと連絡がついたのだ。組織犯罪による秘密墓地と一言でいっても、地域によって状況は様々である。改めてその残酷さを目の当たりにすることになった。そしてぜひ会って見たかったのが、貨物列車の屋根に乗って旅する中米移民を支援する「パトローナス」という女性たちのグループ。まずはそちらから訪問することに。

コルドバのパトローナス

2018年10月、ホンジュラスを中心とした中米からの何千人という移民キャラバンが次々に国境を越え、メキシコに入ってきた。徒歩や貨物トラックの荷台に鈴なりになり、幼い子どもを抱えて旅する映像が報道され、世界的に注目を集めた。キャラバンを迎えたメキシコは、最初こそは支援ムードだったのが、アメリカのトランプ大統領に脅され、それぞれの地域でもあまりの大人数を抱えきれなくなり、政権も世論も移民拒絶に一変してしまった。そんななかで、20年以上前から自前で中米人たちの支援を続けてきた人たちはどうしているのだろうか？

メキシコシティから高速バスでベラクルス州中部の街コルドバまで約5時間。中米移民を支援する「パトローナス」の家があるのは、コルドバからローカルバスで約1時間のアマトランという村だ。しかし、この移動日は間が悪かった。ちょうどその2日前、メキシコで現在最強の麻薬密輸組織「ハリスコ新世代カルテル」が、ベラクルス州政府に対して宣戦布告のメッセージを出したのだ。「用心しろ、双方にたくさん死者が出るぞ」と。

以前は組織と協力的だったのに、新政権になってから態度が一変したからだという。それまでの保守系知事が汚職まみれだったことを思うと、



「パトローナス」の宿舎の壁に描かれた壁画

中央の女性は亡くなった創始者のレオニダスさん。

新知事の姿勢は称賛に値しそうだが、武力でも資金力でも圧倒的なマフィアの脅しにどこまで持ちこたえられるだろうか？

メキシコ在住の日本人の友人からは「今ベラクルスに行っては絶対ダメ！死ぬよ！」とメールが来た。ルシアさんに相談すると、「それはナルコと警察の間のことよ」という返事。…でも、流れ弾で死ぬ人もいるし。別のベラクルス市のソレシートのメンバーにたずねると、「こっちは普通にしている」と。とりあえず、予定通り行くことにした。

午後の便の高速バスでコルドバに着いたのは夜の10時過ぎ。ホテルまでタクシーに乗ると、週末にもかかわらず街に人影がない。たまに目につくのは警察官くらい。タクシーの運転手によると、この2日はみな買い物にも出ず、外出を控えていたのだそうだ。翌朝日が昇ると、街の人たちは普通に活動しているように見えた。さっそく、バスを拾ってアマトランの村へ。「ラ・パトローナ」というのは、貨物列車の走る線路ぞいにあるアマトラン行政区の村の名前である。

1995年、現在の代表者のノルマ・ロメロさんとその母親が、貨物列車の屋根に乗って旅する中米移民を見かけ、たまたま持っていた食物を手渡した。「気の毒な人たちを助けたい」という慈善心から、以来、移民たちに食べ物と水を提供するようになった。移民が増えるにつれ配布する食事の量も増え、多いときは1日300人分のランチを用意してビニール袋に入れ、水の入ったボトルとともに

に列車に乗った人々に手渡していた。列車が通り過ぎるまでの15分ほどの間に、車上から手を伸ばす人々に渡していくのである。

最初は近所の人たちからも、不法移民を助けるなんてと白い目で見られていた。しかしそのうちマスコミが報道し、ドキュメンタリー映画が作られたりして活動が知られるようになると、寄付が集まり、地元スーパーから売れ残りのパンなどが提供されるようになり、世界中からボランティアが来るようになった。自宅を改装して、列車を降りて一休みする中米人やボランティアが宿泊できるようにした。なにしろ365日、日曜もクリスマスもなく、15~20キロのフリホール豆と米の炊き出しをするのである。それだけの仕事に対して、見返りは「神様のお恵みを！」という言葉だけだが、それが何よりうれしい、という。

中米移民たちがメキシコ国内でのギャングの襲撃などを避けるため、キャラバンを組んで来るようになってからは、キャラバンの通り道の街道まで出向いて食事を配布したりもした。その分、貨物列車に乗る人は減ったが、それでも百人以上乗ってくることもある。

私が訪れた日は、5、6人のホンジュラス人とグアテマラ人父子が滞在していた。皆、働き盛りのたくましい男性である。なぜキャラバンで行かなかったのか、とたずねると、「行くための用意ができたときにはもうキャラバンが出てしまっていた」、「こっちの方がいいような気がして」という返事だった。そのほとんどが、2回目や3回目のトライだった。

ノルマさんは、中米人のためにメキシコに一時滞在できるビザの申請や、家族からの送金の受け取りの仲介をしたりもしている。ビザを申請していれば、申請中であっても合法的に就労できるので、近くのサトウキビ畑で日雇いの仕事などをして、旅の資金を稼ぐことができる。無銭で貨物列車やヒッチハイクで旅するより、料金を払ってバスで行く方がずっと安全だからだ。翌朝出発するというグアテマラ人の父子に対しては、どこのルートが一番安全か、移民支援といいながら危険な宿泊所もあるので注意するように、などと細かくアドバイスしていた。

ちなみに、貨物列車の運行は1日に1~3本くらいだが、通過する時間は決まっていない。日本の



代表のノルマさんの妹フリアさん。走行する列車から受け取りやすいように、ペットボトルをひもでつないで差し出す。

ような定時運行などとは程遠いのだ。列車が故障したり、また強盗に遭ったりというのも珍しくない。なので、列車が通過する3時間前に、前の駅にいる仲間が通過時刻と何人くらいが乗っているかを連絡してくれるのだという。だが深夜や早朝に通過する場合には対応できない。「乗っている移民たちも眠っているから、いいのよ」とノルマさん。

この日は大雨が降り続き、そのためか貨物列車が来るという連絡は夜になっても入らなかった。翌朝にはベラクルスに移動する予定だったので、「野獣」に乗った人々に食を手渡す場面を写真に収めることはできなかった。残念。

それにしても、ここで心のこもったランチを受け取り、あるいはバスに乗り換えて北へ向けて旅を続けたとしても、どれだけの人がアメリカ国境を越えられるだろうか？ メキシコの不法移民取り締まりも、アメリカの国境警備も、ますます厳しくなっている。国境の砂漠越えは、成功率よりも命を失う確率の方が高いかもしれない。それだけのリスクを冒しても北米を目指さなくてはならない中米の現実の厳しさを考えなくてはならない。

ソレシート会の再訪

パトローナスの宿舎に1泊させてもらって、バスを乗り継いでベラクルス市へ。ルシアさんが呼びかけてくれて、朝から行方不明犠牲者の家族がインタビューに答えるために集まってくれていた。来てくれたのは9人。妻に同行してきた人以外は皆女性で、探しているのは息子や娘だった。皆それぞれに、恐怖の体験とその後の苦しみを、堰を切ったように話してくれた。皆、誰かに聞いてもらいた

いのだ。しかし、誰にでも話せる話ではない。しかも国内では名前や写真が出ることのリスクもある。外国で出るぶんには大丈夫だろうから、というのだ。

証言のなかには、明らかな強制リクルートのケースもあった。例えば、ダリアさんの息子ヘスは20歳のとき、自宅で妻子と一緒にいるときに、いきなり乗り込んできた武装集団に連行されて行った。男たちはハリスコ新世代カルテルだと名乗り、「彼はこれから政府のために働くのだ」と言ったという。嫁が「いつ返してくれるのか？」とたずねると、「そのうちに」と言われたが、それきりになってしまった。家族は恐怖にかられ、学生だった弟も誘拐を恐れ、学校をやめて州外に出てしまった。そのうち、カルテルとつながりのある知り合いの男が、「探すな、もう殺された」と言いに来た。パニックになっていたが、ソレシートの会に出会い、1年後に行方不明の申し立てをすることができたという。

家族がいきなり行方不明になり、消息も何もわからないという状況自体、残された人々にとっては悲劇である。しかし話を聞くうちに、心の問題だけでなく側面も見えてきた。ひとつは経済面での問題。生計の担い手が行方不明になった家族は一気に困窮する。ローンなどがあればなおさらで、払いきれず、家や車を売却しようにも、行方不明者の名義では処分が難しい。安否の心配に加えて経済的な問題も重なり、ストレスから病気になることもある。さらに、残された子どもの問題も。父親や母親が行方不明になった場合、多くの場合、子どもの養育は祖父母の肩にかかってくる。

警察の無作為、無能さにも、被害者家族は怒りを募らせる。ある母親は、行方不明になってすぐ届け出て、数日間は携帯電話がまだ通じていたので追跡できたのに、警察はその間まったく動かなかった、と話した。また別のケースでは、3年前に行方不明の届け出をしたとき、必要だといわれて息子の顔写真を25枚も用意して提出した。最近になって問い合わせに行くと、ファイルから25枚の写真がそのまま全部出てきた。あきれたことに何ひとつ手も付けず、放置されていたのだ。

一人ひとり、胸が詰まるような話を聞かせてもらっていると、これほどの理不尽な事件が次々に起きているのに、なぜ政府も世論も、さらに国際社

会ももっと問題視しないのかと、怒りと無念さが沸き起こってくる。9人の証言は、また別の機会に紹介することにした。

翌朝、1年前と同じようにサンタ・フェの丘の発掘現場に向かった。懐かしい顔ぶれと数人の初対面のメンバー。「何度も来る人は珍しい」と喜んでもらえた。サンタ・フェの現場は、2018年12月にショベルカーを入れて全域を掘り返し、この時、最期の遺体1体が発見された。もうこれ以上の発見は難しいと見込まれ、次の秘密墓地の発掘にかかるべく、当局の許可を待っているところだ。

現場には発掘された穴の跡ごとに番号を振った杭が立てられ、身元がわかった遺体が出た場所には名前を刻んだ十字架が建てられていた。この3年間の発掘作業で298体の遺体が発見された。しかし、身元が確認できたのはわずか22体である。家族の会がいくら努力して遺骨を掘り出しても、検察庁に運ばれたあとは、DNA鑑定の結果を待つしかない。遺体や遺骨は置き場もないほど山積みになる一方で、検死のための予算も人員もまったく足りない。政権が代わっても、この状況はすぐには変わらないようだ。

砂漠の中の遺骨収集

次に向かったのは、メキシコ北部、コアウイラ州の南西部に位置する工業都市トレオン。州で2番目に大きなこの中核都市は、とくに2010年代初め、犯罪グループ同士の縄張り争いの舞台となり、激しい暴力の嵐に見舞われた。ロス・セタス、シナロア・カルテル、ゴルフオ・カルテルの3つが、州境にあって交通の要衝として重要なこの街の覇権を争い、報復合戦を繰り返したのである。その後、この地域は新たに到来したハリスコ新世代カルテルが支配するようになり、組織間の抗争はとりあえず下火になった。

訪ねて行ったのは、シルビア・ビエスカさんとオスカル・サンチェスさんの夫婦。2004年に行方不明になった当時16歳の娘のファニーを探している。娘は友人の家を訪ねた後、自宅に帰るためにバス停まで歩いている間に姿が消えた。当局に掛け合ってもまったく情報は得られず、やむなく自分たちで探し始めたという。次第に地元の同じ境遇の家族らが集まり、「グルーポ・ビダ (Grupo Vida, Víctimas por sus Desaparecidos en Acción、行動

する行方不明犠牲者の会)」が発足した。

匿名の人物から寄せられた情報などから、原野を探索し、これまで多くの遺骨を発見してきた。

「犯罪グループによって遺体の処理の仕方が違う。川の向こうとこちらで変わっている」とシルビアさん。なかでも徹底して残虐を極めていたのが、ロス・セタスだった。セタスは、敵や裏切り者と疑う人を拷問し殺害すると、遺体を切断してドラム缶に入れ、ディーゼルオイルをかけて焼き、さらに残った骨片を粉碎し、地面にまき散らしたり地中に埋めたりしていたのだ。DNA すらも検出させまいという、徹底した抹殺の仕方である。

郊外の遺骨発掘現場は、灌木が所々に生える半砂漠地帯で、周辺には片方だけの古びた女物の靴や、錆びたドラム缶の欠片らしい金属片などが放置されていた。「あの木の枝に犠牲者を吊るして拷問し、そこで焼いていたのだ」とオスカルさん。気温は40度近くにもなるが、寒気がした。

地面から焼かれた骨片の混じった土を掘り出し、ふるいにかけて、骨の欠片をひとつひとつ拾い出す。1センチにも満たない骨片をピンセットで拾い上げるという、気の遠くなるような仕事である。しかも焼けつくような陽射しのもと、白いつなぎの防護服を着て、長靴とマスク、ビニール手袋をつけていなくてはならない。骨片から採集できるDNAは微量で、作業する人の汗や唾液のDNAの方が検出されてしまう可能性があるからだ。

作業に参加するのは、グループ・ビダのメンバー4、5人で、水曜から土曜までを活動日としている。土曜に活動するのは、仕事を持っている人も参加しやすいようにという配慮である。シルビアさんによると、自分も含めて行方不明者の母親たちは多くが抑うつ状態になりがちなので、何か目標をもって忙しくしている方がいい、という。同じ立場の仲間同士といることで、互いに気持ちを分かち合えるという効果もある。グループの活動に公的な援助はなく、資金はくじ引きイベントなどで寄付を募るほか、ハンバーガーの屋台を出したりもしている。

「この地区の遺骨の収集だけでも、今のペースでは何年かかるかわからない」とシルビアさん。しかも、DNA鑑定は遅々として進まない。長年雨風にさらされたためにDNAが検出できないとされたり、動物の骨だと言われたりもする。ため息の出る



トレオン市郊外の遺骨発掘現場。ボランティアのDNAが混じってしまうように全身を覆う防護服を身につけなくてはならない。

ような、長く、報われない仕事である。彼女もときに無力感に襲われることもある。それでも、「誰かが探してやらないと。ほかに探してくれる人は誰もいないのだから」。

メキシコ政府は自ら仕掛けた「麻薬戦争」に負け続け、暴力に支配される社会を前になすすべもないのが現状である。行方不明者の捜索や秘密墓地の発掘にはほとんど手が回らず、実際のところ、犠牲者家族の会など市民の手に丸投げされているのだ。自前で根気強く捜索活動を行うシルビアさんのような女性たちに、われわれも何か支援できないものか…思案中である。



焼かれ、粉碎された遺骨。DNAを検出するのは実際のところ非常に困難。歯が見つかる可能性は高くなる。



ピンセットを使って、砂から遺骨の破片をより分ける。

大統領選挙・決選投票

「そんりさ」前号 (169 号) で報告があったように、グアテマラでは6月16日に大統領選挙が行われたが、過半数を得票した候補がいなかったために、上位2名による決選投票が行われることになった。上位2名は、希望の党 (UNE) のサンドラ・トーレスと、バーモス党 (VAMOS) のアレハンドロ・ジャマティであった。決選投票は8月11日に行われた。その結果、ジャマティ候補が 57.95% の票を獲得、同 42.05% だったトーレスを抑えて当選した。トーレスは、UNE の支持基盤である3県では手堅く得票したが、他の県ではジャマティに大きく差をつけられるか僅少差であった。反対にジャマティは第一回投票時よりも広く票を集め、当選に結びつけた。投票率は42%と低かった。

次期大統領となるジャマティは、右派で現大統領に大きな影響力を持っている軍関係者の支持があった。刑務所長官だった2006年には「秩序回復」という名目で刑務所に治安部隊を投入、受刑者7人を超法規的に殺害したことがある。これで逮捕され、懲役刑になったが2011年に釈放されている。これでわかるように、「法治」を尊重する政治を行うかは極めて疑問である。就任は来年1月。

ジミー・モラレス大統領

任期が今年いっぱいとなった大統領ジミー・モラレスは、2015年、当時のオットー・ペレス大統領が大規模汚職で辞職・逮捕された後の選挙で当選した。モラレスは政治経験なしの元コメディアンで、既成の汚職まみれの政治にうんざりしきった人々が新しい政治をしてくれるのでは、と期待を託したものだ。だが実際には、モラレスの背後には軍関係者や組織犯罪ネットワークがあり、その強い影響力を行使している。モラレスは、法的なプロセスを無視したペレス以上にひどい政治を行ってきた。以前にも増して構造的な腐敗が蔓延しており、さらに今後のグアテマラの政治状況に深刻な影響を与えることを極めて強引に行っている。

CICIG の終焉

その一つがグアテマラ無処罰国際委員会 (CICIG) を撤退に追い込んだことだ。CICIG はグアテマラ政府と国連の合意により設置された国際的独立調査機関で、その目的は、グアテマラ社会で影の権力にまでなっている犯罪組織ネットワーク (軍高官、官僚を含む) の捜査と、その法的処罰や解体のために検察・警察他国家機関に協力し、司法機関強化を支援し、政策への勧告を行うことである。

2007年9月に活動を開始し、2年ごとにグアテマラ政府が国連に継続支援を要請し、活動が延長されていた。その活動の中で際立つものは、前大統領を辞職に追い込んだ大規模関税汚職の摘発、社会保障庁の汚職、公共事業汚職などで、他にも多くの汚職を摘発した (「そんりさ」154号参照)。

CICIG がモラレス大統領が当選した選挙での不正資金問題を調査し始めたことが直接のきっかけで、CICIG つぶしが始まった。そして、今年1月には、モラレス大統領が国連に対して一方的にCICIGに関する協定の破棄を宣言した。CICIG は9月3日のマンデート終了と同時に解散となり、12年の活動の幕を閉じた。国民の70%がCICIGを支持しており、惜しむ声が多かった。

戒厳令の発令



戒厳令発令地域 (Prensa Libre)

9月3日、イサバル県エル・エストル郡のセムイ II という集落で、軍海兵隊の3人が殺されるという事件が起こった。モラレス大統領は、これが麻薬密輸に関連する犯罪だととして、即グアテマラ北東部6県(アルタ・ベラパス、バハ・ベラパス、エル・プログ

レソ、イサバル、サカパ、ペテン)、22 コミュニティで30日間の戒厳令を発令した。政府発表は、麻薬密輸組織が待ち伏せして兵士を殺害したというものから地元コミュニティ住民による犯行であるなど二転三転した。兵士3人が殺される事態は十分に重大ではあるが、いきなり戒厳令というのはあまりにも唐突で納得のいく説明もない。戒厳令を出すための国際基準を満たしていないという指摘もある。事件発生から1ヶ月以上が過ぎている現在も、捜査は進んでおらず、事件の真相は闇の中である。戒厳令下では、憲法に定められている移動の自由、集会や表現の自由などが制限される他、軍が令状なしで捜査や逮捕ができる。

セムイⅡ村の事件

セムイⅡはマヤ・ケクチ先住民の村で110家族が住む。アブラヤシ・プランテーションの中にある村だ。兵士3人の死体は小学校の裏手で発見された。その日朝、小学校の壁に銃弾が撃ち込まれるという事件も起こっている。学校にいた教師二人は、すぐに子どもたちを帰宅させ、自分たちもそこから逃げたという。村人らは恐怖のために遺体に近寄らず、翌日軍がやってくるまでそこに放置されていた。また同じ頃、村人の一人が流れ弾に当たって腹部に怪我をしたこともわかっている。

しかしそれ以上の情報は、兵士達がどのように殺されたのか、銃撃戦があったのか、などはっきりしたことはわからないままだ。軍は独自の調査をしているが、その発表もない。ある家族全員が重要参考人として連れて行かれたが、その後どうなっているかも不明のままである。事件の後では自殺者も出た。軍の取り調べを受けた村人の一人が首吊り自殺をはかったのだ。やはり事件との関係はわからないままだ。

住民は一様に口を閉ざしており、村の代表も村は麻薬とは無関係だということと、事件について何も知らない、ということ以上は語っていない。村人が兵士を殺害したという説もあったが、遺体を解剖した結果ショットガンで殺されていることがわかり、否定された。

戒厳令の発令で、セムイⅡ村には事件の直後から250人もの兵士がやってきて駐屯している。22コミュニティ全体では2000人の兵士が投入され、

同時に軍基地も新たにいくつも作られた。



住民を調べる兵士 (Prensa Libre)

戒厳令の延長—麻薬取り締まりは？

30日間の戒厳令が終わった10月2日、政府はさらに30日間の戒厳令延長を決定した。この1ヶ月の総括として、軍によると二つの麻薬製造所、5つの秘密滑走路、コカのプランテーション10カ所(合計でコカの木約100万本)が見つかり、300人を逮捕したという。だが、いずれの場所もセムイⅡ村からは遠く離れている。戒厳令が出された地域一帯は以前から土地問題、開発にかかわる問題(バイオ燃料のためのアブラ椰子プランテーション、ニッケル鉱山など)が起こっているところで、近年は麻薬密輸・コカインの原料であるコカの栽培とその精製工場などが増えている地域でもある。

内戦時代への逆戻り？

今回の戒厳令と軍基地の増加について人権団体などは危機感を募らせている。麻薬の取り締まりは口実にすぎず、戒厳令を利用してなし崩しに地域の軍事化と住民のコントロールを進めていく目的なのではないかという危惧だ。実際、内戦中の1980年代には多くあった軍基地は内戦終了後多くが閉鎖されていたのが、今回の戒厳令で再び増えている。人権団体へのしめつけも厳しくなっており、人権活動家の安全も危惧される。



セムイⅡ (Plaza Publica)

グアテマラを発って

ふたたびリュックサックに荷物を詰め、ニカラグアへ向かいました。1974年末のことです。そのころはまだソモサ独裁政権の時代でした。メヒコにいる間にも、友人からソモサが政権を維持するために、密告やスパイが横行している、バールなどでもひそかに聞き耳をたてている、ちょっとした言葉尻をとらえてのいいがかりなど、気をつけていた方がいい、などと聞いていました。どんなに暗い、重苦しい空気か不安な気持ちが心にわだかまっていました。

ホンジュラスからニカラグアの国境に近づくころ、小休止したところで誘拐事件が起きたと知らされ、国境が封鎖される前に通過しようと、バス運転手はにわかに急ぎはじめました。その時は誘拐事件とだけ知らされ、詳しいことは分からないまま、いつものように入国手続きをすませ、宿を探しました。

バスターミナルを出て少し街の中心部に向かえば、たいがいのところでは建物が続き、なんとなくにぎやかになってくるのですが、このときは驚きました。1972年12月23日のマナグア大地震の被害は本当に壊滅的なものがあり、いまだに至るところ空き地が続いているのです。建物の土台だけが残っていたり、壊れた水道管から水が流れるままになっていたり、地震から2年が経っているのにこれが首都の姿かといぶかしくなるほど何もありません。有名なインターコンチネンタルホテルも傾いたままの姿をさらしていました。国際的な援助もみなソモサー家が横領して復興には回らなかったとささやかれていましたが、うなずける噂でした。

この時どんな宿に泊まったのかほとんど記憶がないのですが、空き地に炭火をおこして円錐形の焼き網をしつらえ、肉を焼いている食堂があり、そんなところでマナグア最初の食事をしたのが思い出されます。やや大きめのトルティージャも柔らかく美味しく、勧めてくれるお店の人の穏やかな優しい感じに緊張していた気分がほぐれていきました。



ルベン・ダリオが少年期に暮らした家(現博物館)

この往路でのニカラグア滞在はほんの数日だったのですが、マナグアから少し離れた詩人ルベン・ダリオが少年期を過ごした地、レオンへ行きました。コロニアル建築物が多い美しい落ち着いた雰囲気のある町です。すこし町はずれにいけば農村風景がひろがり、宿もぐつと田舎びてきます。

そんな宿の1軒に泊まったのですが、レバノンからの移民の経営する宿でした。なんでもレバノンから相当の人数が移民ってきていて、このあたりには結構多いのだそうです。食堂には移民仲間が食事にやってきて、夕方の時間を楽しんでいます。私たちにもアラビア文字を教えてくれたり、こちらは日本文字を教えたり、思いがけない出会いでした。

レオンからマナグアへ戻る長距離バスは、クリスマスの終わった時期なので満員です。だいたいバスのなかでは常にといいほどラジオがついていますが、にわかに普段と違う緊張が走ったのです。コミュニケが発表されるといいます。それはサンディニスタ民族解放戦線のゲリラ部隊が数日前（1974年12月27日）、元農相カスティジョの豪邸で米国大使などの要人を招いて開いていたパーティ会場を占拠、彼らを人質にしたといっています。

まさに私たちの乗ったバスが国境近くで聞いた誘拐事件のことです。そしてゲリラが人質解放の見返りとして要求した4つの項目は、①獄中の14名のサンディニスタ同志を釈放し、キューバへの出国を認める、②最低賃金を引き上げる、③1万2千字からなるコミュニケ全文をマスコミを通じて、報道する、④600万ド

ルの資金を提供するというものだった。

その要求の第3番目のコミュニケの報道がなされたのです。満員のバスはシーンと静まりかえり、乗客は全身を耳にして聴き入っていました。一言も聞き漏らすまいという、何とも言えない緊張と期待とといったいいのでしょうか、熱望というような一種異様な張り詰めた空気です。バスの騒音もあって、十分に聞き取れたわけではないのですが、独裁政権下で犠牲になった人びとの名前をあげ、独裁政権、そしてその手先として働く国家警備隊を批判する内容だったように思います。数日後釈放された政治犯たちがキューバへ向かう道にはたくさんの人が集まり、熱狂的に彼らを見送ったと、報道されていました。

私たちはその後すぐにニカラグアを離れ、南からの帰途、およそ1年後に再び戻ってきました。どんなふうになり合ったのか、いまは思い出せないのですが、たぶん、それじゃあ、家に泊まらないか、くらいの軽い感じで誘われた青年の家にやっかいになりました。グラナダの町のことです。年代を感じさせる家は少し細長く、いくつも部屋があって、きれいに掃除が行き届き、青年のお母さんは教会のボランティア活動をしているとのことで、居間で書類を整理したりしながら、いろいろ話してくれました。青年の方は、グラナダのチチャロンはすごく美味しいから、これを食べずに帰ってはいけないと買ってきてくれたり、あちらこちらへと案内をしてくれました。

往路の滞在の時には「独裁政権下」という言葉にかたまってしまっていた気持ちが、こんな何気ない日常の付き合いに溶けていきました。その青年になにかの集まりに連れてってもらい、親しくなった彼の友人たちとも集まってただ喋っていたり、フェリアがあるから行こうとか、取り立ててなんということもない付き合いです。そんな中で話したことのひとつが、いまでも強く記憶に残っています。

「ニカラグアでは身分証明書携帯が必要じゃあないんだよ」と、言われたように思うのです。ひょっとすると、これは私の聞き間違い、記憶違いかもしれないのですが。中南米では「身分証明書」を常に求められることが多いのです。それを持っていないと拘引されることもあります。ニカラグアのような独裁政権



グエグエンセ (2008年ユネスコ無形文化遺産指定)

下で?というのが、私の反応だったのですが、「たしかに独裁政権下だけど、証明書のようなものは不要なのだ」と、誇らしげに言われたことが記憶に残っています。

この言葉はニカラグアに伝わる『グエグエンセ』というドラマを思い起こさせます。『グエグエンセ』というのは、スペインの支配下にあったとき、ニカラグアの人びとはスペイン人に分からないように母語ナワトル語とスペイン語を折衷させた言葉を使用して、主人公「エル・グエグエンセ」が表面上はスペイン人の言うことを聞いているように見せかけながら、巧みに身を護る喜劇的な内容をもったドラマです。踊りと音楽とともに演じられる有名なドラマです。

再びマナグアへ入り、この時はおそらく新聞などでその催しを知ったのですが、反ソモサで知られていた詩人のカルデナル神父、歌手のカルロス・メヒア・ゴドイ、ラディオ・グエグエンセ、大きなスーパーマーケットの社長などの呼びかける集会に行きました。ソモサの独裁に反対する人びとの集会と分かっているのですから、どれだけの妨害や国家警備隊が出てくるのか、不安な気持ちもあったのですが、まるでパーティのような雰囲気の内心驚きました。カルデナル神父の話や、メヒア・ゴドイの歌をはじめ、たくさんの人が登壇したのですが、激しい言葉ではなく、どこか穏やかな口調で語っていたのが印象的でした。

それから4年半余ののちの1979年7月、ソモサ政権はサンディニスタ民族解放戦線に倒されました。

参考図書

オマル・カベサス『山は果てしなき緑の草原ではなく』
(現代企画室、1994年)

セルヒオ・ラミレス『ただ影だけ』(水声社、2013年)

80年経っても終わらない内戦

スペイン内戦（1936～39年）終結から80年経った今年2019年、内戦を戦った左右両翼の流れを汲むPSOE（スペイン労働社会党）とPP（国民党ないし人民党）は多党化の波に翻弄され続け、両党とも安定政権を築くのが不可能になっている。だがサンチェス政権が決めた今年6月のフランシスコ・フランコ（1892～1975）の遺体移転は実現せず、無期延期状態に陥った。ことフランコの扱いとなると、新旧保守・右翼・極右がこぞって稼働し「国論を2分」させ、PSOEをはじめ左翼・進歩主義勢力の前に立ちはだかる。この遺体移転策は、ロドリゲス＝サパテーロ元政権期に成立した「歴史の記憶法」に基づくのだが、同法の最も重要な部分の施行が阻止されたのだ。

マドリー郊外の岩山に築かれた巨大な「慰霊」施設バジェ・デ・ロス・カイドスの地下聖堂最奥部の祭壇前の敷石の下にフランコは眠っている。隣は、フランコが内戦からの一時期、叛乱正統化の思想的理由付けにした極右ファランへの党首ホセ＝アントニオ・プリモデリベラの墓。この施設の建設には、内戦で捕虜になった共和派の奴隷労働という大きな犠牲の与るところが大きい。施設はどう見ても、驕り高ぶっていたフランコ派ファシズムの自己礼讃の記念碑でしかない。

ファシスト独裁者の遺体移転という歴史的事業が頓挫したのは、正義派世論の弱まり、伝統政党（PSOE）の弱体化、左翼分散化、保守・右翼の分散しながらの健在、極右政党VOXの出現という政治地図の塗り替えによる。こうした現象は、反移民世論が高まる欧州諸国の右翼台頭と連動している。

[日本でも地方政界に移民労働者受入に反対する声が出始めている。]

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

私は、ジャーナリズムコースにいた学生時代、第2外国語として西語を選んだこともあってスペイン内戦史を学び、さまざまな関連書を耽読した。特に印象に残り「座右の書」としてきた本の中から2冊を選べば、ジョージ・

オーウェル『カタロニア讃歌』（1938年、邦訳書多種）と坂井米夫『ヴァガボンド通信』（1939年、改造社、復刻版『動乱のスペイン報告』1980年、彩光社）を挙げねばならない。ご両人は、ジャーナリストの模範的先人である。

英国人オーウェル（1903～50）は「ファシズムを食い止めるため戦わなければ信念にもとると」1936年末スペインに赴き、37年6月までの半年近く、共和派人民戦線側で戦士として戦い、首に敵弾を受けたが辛くも生還。帰国して歴史的名著を書いた。

坂井（1900～78）は1937年6月から3ヶ月、フランコ反乱軍側と人民戦線側の両方を取材。オーウェルとは趣の異なる名著を物にした。フランコ将軍にサラマンカでインタビューし、バレンシアでは共和国側のファン・ネグリン首相に会った。「両論併記」を見事に象徴する取材ぶりだ。マドリードではアーネスト・ヘミングウェイに会っている。

私は学生時代の恩師・酒井寅吉が発行していた『総合ジャーナリズム研究』という月刊誌で坂井が連載していた自伝『私の遺書』（同名の単行本は1967年、文藝春秋社）を読んでいたため、坂井と改造社本の存在を知っていた。メキシコ五輪のあった1968年の3月ごろだったか、当時の私の職場、邦字紙『週刊日墨』社兼共同通信メキシコ通信局に、産経新聞ワシントン支局嘱託だった坂井から電話があり、話したことがある。受話器を握る私は緊張しきっていた。半世紀余り経つ今、何を聴き話したのか、ほとんど覚えていない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

私はラ米取材を通じて、フィデル・カストロからアウグスト・ピノチェーまでにスペイン内戦の影響を見た。だが最も影響を受けているのは、当然のことながら内戦の延長線上に生きるスペイン人だ。フランコの亡霊が未だに「国論を2分」する。それは我々日本人が1868～1945年の歴史に依然、雁字搦めにされているのと同じである。

既に過ぎてしまった話で恐縮だが、今年の7月28日、ペルー人たちによるペルー人のためのペルー独立記念日を祝う東京新木場でのペルー・フェスティバルがあった。今年はペルーの国民的音楽の一つであり、1990年代後半から2000年代を席卷したロシ・ワーとルツ・カリーナというテクノクンビアの女王二人が来日し、会場を大いに盛り上げた。ここ数年、私も体調不良や多忙で行けなかったりした新木場スタジオ・コーストでのこのフェスティバル。今年だけは何があっても行かねばならぬと駆けつけ、ペルーでも見れなかった夢の共演を満喫することができた。そんな訳で、今回はテクノクンビアと彼女たちについて少し紹介できればと思う。

今回ご紹介するテクノクンビアとは、これまでもちょびっと紹介したが、クンビアという音楽の亜種にあたる。コロンビア発のクンビアはラテンアメリカ各地で土着化したが、ペルーはその一大拠点として発展した場所であった。こうした1970年代、1980年代ペルーのクンビア文化の隆盛は、近隣諸国にも大きく波及した。ペルーのクンビアは元来アンデス・クンビアを指した「チチャ」と総称されて国外では受容されていった。

ところがその後、ペルーではこれらアンガラ的な要素も強かったクンビアのポップス化、アイドル化がやってくる。それが次の世代であったテクノクンビアとクンビア・ノルテーニャだ。

クンビア・ノルテーニャは、ペルー北部からエクアドルにかけての音楽を取り込んだよりポップなクンビアでオルケスタ編成が多い。アルモニア10やアグア・ベジャなどが代表的だ。それに対してテクノクンビアは、アマゾンから生まれたポップなクンビアで特にテックスメックス(メキシコ北部からアメリカ南部のメキシコの影響が強い地域の音楽)、中でも歌姫セレーナの影響が強い。テクノクンビアの名前も、セレーナの1994年発表の楽曲からきている。また、その衣装や音楽などの一部が



ライブコンサートのフィナーレ・シーン

ブラジルの影響も受けている。露出の激しい衣装で背中に羽を背負い、享乐的な樂園としてのアマゾンイメージとして作り上げている(もっとも歌詞は必ずしもそんなことはなく、失恋の歌なども多い)。

そんなテクノクンビアの最初期から活動しているのが、今回来日した一人であるロシ・ワーだ。アマゾン圏であるマドレ・デ・ディオス県に生まれ、幼くしてプエルト・マルドナドへ転居。15歳から現地バンドに入るも17歳から首都リマへ移住。そこで仕事をしながら音楽に携わる道を探し、1984年にはテクノクンビア草創期のバンド、ロス・ビオ・チップスに雑用として参加。その中で徐々に頭角を現し、やがてコーラスとしてステージに上るようになり、ついにはソロボーカルをも担うようになる。その頃、同じバンドメンバーであったティト・マウリと恋仲になり、二人で独立して1995年にはソロアルバムをロシ・ワーとバンド・カリエンテ名義で発表し、一気にスターダムを駆け上がっていった。

彼女の歌の特徴は、一度聞いたら忘れない艶やかで非常にハスキーな声。その類まれなかすれ声で恋の辛さを歌い上げる姿に、多くの人はあつという間に魅了された。ティトと二人三脚でテクノクンビアをペルーを代表する新ジャンルとして決定づけたまさに立役者であった。しかし、ハードすぎるスケジュールが祟ってか、2000年に歌手としての活動を休

止してしまっていた(2011年復帰)。

そして、来日したもうひとりのビッグアーティストであったルツ・カーリーナは、ロシ・ワーより少し世代が下がる。ロシ・ワーが革のソングレロにパンツ&ブーツでカウガール風に渋く決めていたのに対し、ルツは露出の大きい羽を背負ったバックダンサーたちを引き連れて、少し甘ったるいよく通る声で激しく踊りながら歌うパフォーマンスを披露する。また曲の傾向も、とにかく踊らせることにより特化した曲が多く、ダンス映えするように曲のリズムもかなり激しくなっている。

ルツ・カーリーナはペルーのアマゾン地域の町プカルパに生まれ、3歳でイキトスに引っ越している。女の子が音楽で食べようなんて許さないという保守的な家だったようで、本人は非常に苦労して歌の世界に入ったという。とは言え12歳からイキトスで活動するバンドなどで活動したのち、テクノクンビアを代表するバンド、エウフォーリアで4年間活動することで揺るぎない人気を確立した。

その後エウフォーリアから独立してソロ歌手として「ルツ・カーリーナとグルーポ・パ・ゴサル」で新境地を目指した。2000年代テクノクンビアを牽引し、その華やかなアマゾン・イメージを利用したスタイルは、当時のテクノクンビア人気歌手たちも踏襲した一つのスタイルとなっていた。実は過去に日本へのツアー経験もある。

そんな二人が今年の東京・新木場で開催された独立記念のペルー・フェスティバル2019に来日したのだ。今年のペルー・フェスは、そんなわけで来場者も例年に比べて少し多かったんじゃないかと言われている(私はこの数年行けていなかったの、向こうで会ったペルー人談)。

実際のライブはもうめっちゃめっちゃに盛り上がった。始まる前から期待値マックス状態で、コアなファン層はうちわ持って最前列死守状態。トップバッターはルツ・カーリーナ。キレッキレのダンサー二人とともに、まずはペルーの独立記念日を讃えるバルスの名曲「コンテューゴ・ペルー」から始まる。そしてそのまま怒濤のテクノクンビア・ショーへ。若干大きくなって声も心持ち太くなったようではあるが、それでもあの高音の甘い声で歌う彼女を



ルツ・カーリーナとロシ・ワーの共演

見ると、ルツ・カーリーナ健在ナリとそれだけで感無量。昔のように激しく踊りなが歌うことはないが、それでも決めめのダンスはばしっと決める。そしてその分、両翼を固めた二人がガッツリ1時間ミラクルな踊りを披露し続けた。また、彼女のレパートリーを中心に歌うだけでなく、後半テクノクンビアだけでなく、アマゾンクンビアの古典曲「うちのじいちゃんが死んじゃった」やアンデス・クンビアの大スター、チャカロンの代表曲などを熱唱して、更に会場を盛り上げた。

そしてメイン後半はロシ・ワーが務める。こちらは夫のティト・マウリ、息子のトニーによる歌・ギター・ドラムというトリオ編成だ。いつもながらの黒装束でハスキーな歌声が始まるだけでこちらも一気にヒートアップ。冒頭からメドレーで彼女の代表曲からはじめ、会場をさらに熱狂させるのはさすがだ。途中でペルー讃歌「ミ・ペルー」をはさみつつ、怒濤のクンビアメドレーを繰り広げ、終盤にはセレナの「テクノクンビア」に乗せてなんとルツ・カーリーナを呼び寄せ、夢の共演！二人が歌う往年の名曲に更に酔いしれるという素晴らしいステージだった。

予定時間を大幅にオーバーしてのステージに大興奮したあとは、しっかり彼女たちのCDを購入して一緒に写真を撮ってもらおうというファンぶりを発揮して帰ってきた。まさか日本でこんな幸せなステージを目のあたりにできるとは思わなかったと、しばらくはテクノクンビアが我が家のヘビーローテーションとなったのでした。

ぜひ皆さんもめくるめく熱帯の宴へと足を踏み入れて行ってほしいものです。

マヤ風サルサ

SALSA MAYA

メキシコ料理を構成する重要な要素のひとつがサルサです。地域によってさまざまな材料を使ったサルサがありますが、もっとも古いサルサのひとつが、トマトを使ったものです。今回はトマト味のマヤ風サルサです。

ユカタン半島には、サルサの材料となるトウガラシやトマトの品種が無数にあります。

現在のユカタンの人びとはみな、貧富の差にかかわらず日々の食事のために家でサルサをこしらえています。



材料(4人分)

- ・ トマト中 4個
 - ・ 白いタマネギ大 1個
 - ・ コリアンダー 大さじ8杯
 - ・ 酸っぱいオレンジ 1個
- メキシコや米国では瓶詰め果汁を売っている。
カボスやスダチ4個でも可
- ・ ラディッシュ大 4本
 - ・ 塩とコショウ 適宜

作り方

- (1) 包丁の先端で、トマトの軸とへたの部分を取り除き、アルミホイルの上でトマトを焼く。表面が十分焼けてきたらボウルに取りだし、焦げた皮を除き、フォークでソース状になるまでつぶす。

- (2) タマネギの皮をむき、1センチの厚さに切り、アルミホイルの上で焼く。よく焼けたら、1センチ角に切り、ボウルのトマトに入れる。
- (2) コリアンダーをみじん切りにして、ボウルに入れる。
- (4) ラディッシュの葉を取り除き、小さな角形に刻み、ボウルに入れる。
- (5) 酸っぱいオレンジ(スダチやカボス)の果汁を加える。
- (6) 塩とコショウで味を調える。
- (7) すべての材料を混ぜたらできあがり。

豚肉や牛肉、目玉焼き、焼き魚、魚のフライなど
といっしょにどうぞ。

(1) 急激なアマゾン森林火災拡大の原因

ブラジルでは何千 ha の熱帯雨林が数日間で灰燼に帰している。アクレやアマゾナス州などアマゾン地域の多くの州で非常事態宣言が出された。国立空間研究所によれば、今年 1~8 月に記録された火災は 7.4 万件を超え、前年同期に比べ 83%増加し、2013 年の観測開始以来最大の発生件数となっている。大統領ボルソナロは、森林保全地区、先住民族保護区、国境地域に兵士を配置し消火活動を命じた。森林火災は、ボリビア、パラグアイ、ペルーのアマゾン地域にも悪影響を及ぼしている。8 月 25 日、ボリビアのモラレス大統領は、チキタニア地域の消火活動のために国際支援受け入れの準備をしていると述べた。8 月 26 日、フランスで開催された主要 7 カ国首脳会議は、アマゾンの消火活動のため 2,200 万ドル拠出に合意した。

ブラジル環境省は乾季、強風、暑さが原因と説明し、大統領は環境 NGO が政権の弱体化を狙って放火していると放言した。しかし、アマゾン環境研究所 (IPAM) は、今年のアマゾン地域の気温は平均より低く、異常な乾燥状態ではなく、火災は人為的なものと指摘する。火災の深刻な増加は森林伐採が進んでいる地域に起きている。農民は森林を伐採・焼き払った土地で放牧し、大豆などを生産する。伐採した木や下草が乾燥する乾季に火入れが行われるため、例年 8・9 月に火災が多くなる。

しかし、7 月に政権によって熱帯雨林で土地を広げるための野焼きが許可されたため、牧畜業者が故意に火災を発生させていることが指摘されている。アクレ州大学と IPAM の調査によると、火災発生件数は森林破壊と直接関連しているという。最も森林破壊が進んでいる 10 市町村 (43%) が今年火災の最も甚大な被害地域 (37%) で、森林破壊が進んだ地域の植生が火災できれいに焼き払われていることは、火災の意図的な性格を強く表している。気候変動が直接の原因ではないとしても、わずかの気温上昇でも、既に大きなダメージを受けているアマゾン地域では森林が燃えやすくなる。

出典：BBC Mundo, 26/08/2019 より

(2) パラグアイ独裁者の農場跡から頭蓋骨

9 月初旬、イグアスの滝に近いパラグアイ・エステ市の農場「フィンカ 66」の一角にある邸宅跡から、複数の人骨が発見された。地元民が「恐怖の館」と呼び、財宝や幽霊が潜んでいると思われていた邸宅は、1962 年以來、独裁者アルフレッド・ストロエスネル (1954~89 年大統領在職) が所有していた。独裁者の亡命後、所有権をめぐりエステ市当局と独裁者の孫の間で係争が発生し、農場はほぼ廃墟と化していた。8 月末に農場を占拠した土地なし農民グループが、金銀埋蔵の噂に基づき、邸宅の浴室のタイルを剥がすと 3 つの頭蓋骨と多くの人骨が見つかったという。周辺住民によると、昔から一帯での金銀探索で人骨が発見されることはあったが、通報されることはなかった。

独裁政権崩壊後も、軍人出身者が政権中枢部にとどまり続け、パラグアイでは行方不明者の話はタブー視され続けた。ほかの中南米諸国と異なり、軍事政権による人権侵害の真相を究明する動きは低調で、真相正義委員会が組織されたのは 2004 年だった。真相正義委員会の報告では、独裁期の強制失踪者は少なくとも 423 名以上、約 1.9 万人が拷問されたという。しかし、政権崩壊後の 30 年間で発見されたのは行方不明者の遺体は 37 名、身元判定者は僅か 4 名という。今回発見の人骨が独裁政権期の行方不明者であるかは不明である。

独裁者が国内各地に保有していた館は単なる別荘でなかったことは徐々に明らかになっている。1992 年にアスンシオン市内の館からは「コンドル作戦」の実行に関する多くの資料が発見され「テロ文書館」であったことが判明している。また、多くの証言から、小児性愛者のストロエスネルは 9~12 歳前後の男児たちと性関係を持ち、軍関係者も同様の行為を行っていたとされる。今回人骨が発見された館でそのようなことがあったかどうかは不明である。しかし、行方不明者の家族にとって、最低限の心の平安をもたらすためにも、人骨の身元を確定すること不可欠である。

出典：BBC Mundo, 13/09/2019 より

(3) 抗弁する権利：人々は語る

メキシコ AMLO 政権は、先住民が多く住む南東部の停滞打破を掲げ、巨大開発計画を推進している。政権は巨大開発計画に関する協議を実施し、開発計画は住民に承認されたと主張する。しかし協議の参加率は僅か数%というレベルで、計画対象地域に居住する先住民共同体は、国際労働機関 169 号協定の定めた事前協議抜きで計画強行と異議申し立てを行っている。

独立系メディアの編集長グロリア・ムニョスは、南東部で展開しているマヤ鉄道計画、テワンテペック地峡部回廊計画、モレロス州統合計画巨大開発に対する異議申し立ての声を汲み上げ、「抗弁する権利：人々は語る」を9月に発表した。3部構成のレポートは、取材記事、25~40分の映像、50枚前後の写真集で構成されている。

モレロス州統合計画を扱った第1部「サパタの土地の巨大計画」とテワンテペック地峡部回廊計画を取り上げた第3部「メキシコの腰部」は、「そんりさ」169号で角さんが紹介した事例である。第1部の映像資料では、サミール・フローレス殺害の直後にもかかわらず協議を強行し、就任前に計画反対を表明していたはずの AMLO が「計画反対者は進歩を妨げる反動(fifis)」と論難する姿がはっきり映しだされている。第3部では、オアハカ地峡部の風力発電計画だけでなく、先行する開発計画に関しても様々な資料が紹介されている。計画実施に向けた住民協議の実態が紹介されるとともにそれに抵抗する自治的運動も紹介されている。

第2部「その軌道、我らの大地」は、ユカタン半島5州にまたがるマヤ鉄道計画を扱ったものである。一帯の先住民共同体は、太陽光・風力発電というグリーン・エネルギーやグリーン・ツーリズムに代表される持続可能性を旗印にした新自由主義的開発の押しつけで、計画発表以前から様々な問題に直面していた。代表的例としては、森林破壊や農薬によるユカタン養蜂業の衰退、ユカタン州オムンの巨大養豚場の廃棄物による環境汚染、工場的農業による過剰な地下水汲み上げによる水不足などが挙げられる。また、中米移住者のメキシコの出発拠点であるタバスコ州テノシケに関するレポートや、高校で学ぶ若者たちの鉄道計画で就業機会が増えることを期待する声も拾われている。

出典：<https://hablanlospueblos.org/>

(4) 不死の人、フランシスコ・トレド

9月5日、オアハカ州フチタン出身の芸術家フランシスコ・トレドが79歳で亡くなった。彼の作品には擬人化した動物や擬獣化した人間が描かれ、重厚な鎧を着たような版画や油絵から、『ボルヘスの幻獣事典』に所収された軽妙な水彩画まで多様なレパートリーがある。こうした創作活動だけでなく、文化・自然資源、領域や自生トウモロコシ、人権の保護のため、一貫して権力とも真っ向から対峙してきた。

欧米滞在から帰国後、ビクトル・デラクルスらとともに地峡部の文化活動の拠点として1972年にフチタン市に「文化の家」を創設し、1980年代初頭までフチタンの民主的文化運動の一端を担っていた。1980年代後半、オアハカ市に本拠を移し、オアハカ・グラフィック芸術協会を組織し、オアハカ現代美術館、マヌエル・アルバレス・ブラボ写真センター、サンアグスティン芸術センターなど、メキシコの現代芸術活動の基盤を独自に整備した。

1993年、オアハカ自然文化遺産防衛保全協会(PROOAX)を組織し、多岐にわたる文化運動を展開した。その一つは、セラゲツァの会場への文化コンベンション会館建設反対、サントドミンゴ教会脇への民族植物園設置、市歴史地区へのマクドナルド進出反対(2002年)などの文化的遺産の保全運動である。また、マクドナルド進出反対の論拠「新自由主義のジャンク食品」反対=伝統的なタマル擁護の理念は、2014年の遺伝子組み換えトウモロコシ反対署名運動に繋がり、AMLO政権のマヤ鉄道建設計画にも反対していた。1980年代のフチタンでの人権抑圧、2006年のオアハカ人民民衆会議(APPO)への弾圧、2015年のアヨツィナパ学生43名行方不明事件など、権力の人権抑圧には一貫して抵抗してきた。メキシコが破壊される時代にあると自覚していたトレドは多くの種(semillas)を残していった。



遺伝子組み換えトウモロコシ反対キャンペーン

出典：pagina3,09/9/2019



アヨツィナパ行方不明学生43名を描いた凧で疾走

1988年、ニカラグアのカリブ海岸の北部国境を流れるココ川沿いで会った、ミスキート民族のゲリラ司令官アギラ・ネグラ（黒鷲）は、威厳に満ち溢れていた。

2017年、ふたたび訪れたが、アギラの居場所がなぜかわからない。さがしはじめて4日後、タクシー運転手に30年前の写真を見せると「実は友達なんだ。マスコミから隠れてるけど、写真があるなら会ってくれるよ」。私の宿のすぐ近くの政府事務所でサンディニスタの旗をあしらったシャツを着て警備員をしていた。「あと数年で年金が出る。それまでは政治にはかかわらんよ」。あのアギラが「生活」に埋没している。それだけニカラグアは穏やかになったんだ、と思った。

そんな「トランキーロの国」で暴力がふたたび吹き荒れている。私には原因がわからない。アギラは今、何を考えているんだろう。 (藤井 満)

今回の「そんりさ」印刷作業は東京で、2020年1月11日（土）

発送作業は関西で、2020年1月18日（土）の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

Vol. 169 対話による解決を訴えるベネズエラ左派の声	Vol. 165 闘う女性たちの集会
Vol. 168 AML0、新自由主義政策と決別か	Vol. 164 グアテマラ・帰還難民のムラの20年
Vol. 167 混迷が続くニカラグア	Vol. 163 ニカラグア解放の神学30年
Vol. 166 AML0 津波的勝利の後には	Vol. 162 エルサルバドル 昔と今
	Vol. 161 コロンビア革命軍の最後

メーリングリスト

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます。

入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org まで、ご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

会員の種類

- ☆会 員：年 8,000円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆学生会員：年 5,000円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆賛助会員：年 10,000円（一口） 総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆購読会員：年 4,000円 …『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先 〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方 TEL 075-862-2556（留守電） お問い合わせは、E-MAIL、手紙、もしくは 留守番電話にメッセージをお願いします。 ホームページ： http://www.jca.apc.org/recom E-mail : recom@jca.apc.org Facebook : https://www.facebook.com/recomsonrisa/	郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク レコム口座 118万1270円 グアテマラ基金口座 119万2024円 (2019年10月現在) そんりさ (SONRISA) 170号 2019年10月19日発行 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 定価 400円
--	--